

2020年9月27日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「収穫の主に願いなさい」マタイによる福音書9章35～38節

主任牧師 加藤 誠

**「(イエスは)群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれました。そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き人が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい』(マタイ9章36-38節)。**

イエス・キリストの教会が託されている「伝道」の働きは、どのような働きなのでしょう。「それは当然、イエス・キリストを知らない人、信じていない人を、イエス・キリストの信仰に導くことだ」と多くの人は答えるでしょう。今日の箇所に出てくる「収穫の主に願いなさい」という言葉についても、「収穫とは、イエス・キリストを信じる人が増えることであって、それが第一の願い」と理解するのが、これまでの教会の常識的解答だったように思います。もちろん「イエス・キリストを紹介し、その信仰に導くこと」は大切な働きです。マタイ福音書の一番最後に主イエスは「全世界に出て行って、福音を宣べ伝えよ」と言われていますから、「福音を宣べ伝えること」は教会の一番大切な働きであることに変わりありません。

けれども今日の場面を読む時に、主イエスが何に心を痛めて、どのような「収穫」を祈り願っておられるのかをもう一度読み直してみたいのです。ここで主イエスが悲しみ痛んでおられる「飼う者のいない羊のような状態」とは、「人びとが本来守られるべき命の尊厳を奪われて、弱り果て、打ちひしがれている現実」です。つまり単に「羊たちがかわいそうだ」と同情しているのではなく、「飼い主である権力者が本来の責任である、羊たちを養い育てる責任を放棄していること」に憤りを覚えながら、羊たちの弱り果てている惨状に、深く心を痛めておられるのです。

実際、当時の「羊飼い」として立てられていた「王やユダヤ教指導者たち」は、自分の事ばかり考えて羊の世話をせず、むしろ羊たちを過酷に支配して痛めつけていました。そのために人びとは弱り果て、打ちひしがれて、どこにも行きようがなく、主イエスのもとに助けを求めて押し寄せてきたのです。主イエスは、王やユダヤ教指導者たちの無責任ぶり、いや、神への背信ともいうべき罪深さに憤りを覚えながら、人びとが行き場なく弱り果てている惨状に心を痛められたのです。

ですから、ここで主イエスが祈り願っておられることは、羊飼いたちが悔い改めて本来の責任に立ち帰り、神さまの前に大切な羊である一人ひとりが、神の愛と神の正義のもとに取り戻されて、元気に命を回復していくことです。そのことを考える時、主イエスがここで言われている「収穫」とは「社会の責任ある人びとが悔い改め、人びとがほんとうの神さまの愛と正義にあずかって喜びの命を生きていくこと」であり、そのような働きに教会が仕えていくことを願い祈っておられるのです。

それゆえイエス・キリストの教会は、イエス・キリストの福音がどのようなものであるかを人々に紹介し伝えると同時に、それが直接イエス・キリストを信じる人を増やす働きにつながらなくても、今の私たちの社会が抱えている深刻な歪みのために神の愛と神の正義から遠く切り離されて、弱り果て、打ちひしがれている人々を覚えて、その命の回復のために仕えていく働きも大切な「伝道」であると理解するのです。

例えば、長崎県の大村入国管理センターに収容されている外国人の支援をしている長崎インターナショナル教会の柚之原牧師の働きがあります。柚之原牧師は最初から、外国人支援にイエス・キリストに仕える働きの意味、伝道の意味を見出だされて、知り合いの一人もいない大村で、今から15年ほど前に教会の働きを始められました。柚之原牧師はこう語っておられます。「日本の難民認定率は先進国の中で最低（0・4％）で、世界基準では明らかに難民とされる人々が『不法入国者』と扱われています。『不法』と聞くと犯罪者をイメージする人が多いかと思いますが、母国に帰ると迫害を受ける難民、さまざまな事情で不法滞在となった留学生など犯罪とは無関係な人が多いのです。近年、特に増えているのはベトナム、フィリピン、インドネシアなどの技能実習生です。多くは職場から失踪、不法滞在の理由で収容されます。しかし、それぞれの背景にある過酷な労働実態を知れば、それが無責任な失踪ではなく、自分の命を守るための避難であることがわかります。時給四百円以下の低賃金、給与の未払い、契約違反、長時間労働、いじめ、暴言…。差別され、経済的に搾取された外国人と面会で会うたび、私は申し訳ない気持ちでいっぱいになります」（『百万人の福音』2020年10月号より）。

わたしはこの柚之原牧師の「申し訳ない気持ちでいっぱい」になっている心に、主イエスと同じ心の痛みを見ます。本来受けるべき正当な処遇を受けることがゆるされずに、犯罪者として扱われて命の尊厳を奪われている外国人の一人ひとりに、自らの責任を感じながら神の愛と神の正義を持って関わっていかれる柚之原牧師の姿に、「収穫の主に願いなさい」と祈られた主イエスに従う弟子の姿を見ます。もちろん柚之原牧師が担っておられる働きは、主イエスが祈り願われた伝道の一つの形であって、私たち一人ひとりが「収穫の主に願いながら」仕えていく働きはいろいろな形がありえるでしょう。それは目の前の小さな子どもに仕える働きかもしれないし、家族や友に仕えていく働きや、地域の誰かに関わっていく働きの中にも隠れているのかもしれないかもしれません。いずれにしても、主イエスが「飼い主のいない羊のように弱り果てている現実」に心を痛めていかれたように、すべての一人ひとりが神の愛と正義のもとに連れ戻されて、元気に喜びの命を回復させていくことを祈り願いながら、それぞれ「収穫の主」に仕えていく働きをささげていきたいのです。